

第十二 国体の上より観たる政党政治の弊害

一、議党派派の起る所以

人間の弱点として、其の直接関係の利害より、政府員は政府のみを代表したるものと思ひ、国民の利害を顧慮せずして政府のみに便利なる立案を提出し、議員は国民のみを代表したるものと思ひて、国民にのみ便利なる立論となり、建議案とも為るのは、自然の傾向である、相互に討議し相互に交譲して、其の中正の理を發揚し、中正の理に帰入裁決するのが政府員としても議員としても、其の本来の責任を尽すものと為ると共に、是れこそ即ち国民意思にして、国家意思にして主権者の意思にして、議會そのものゝ意思である、相互に争論衝突し、解散するのは、議會本来の意思ではない、国家全体の意思でない。

然るにともすれば、政府員も議員も、此の統治全体の意思を忘れ、其の意思發動の、総合・調和・統一・大成といふことを忘れ、公明中正の理に帰入するといふことを忘れ、常に交譲の徳、調和の才を欠き、一に唯その直接関係の利害にのみ囚はれ、相互に自己直接利害の立案建議を押し通さんとするのみでなく、更に議會を利用して自己の主張を逞くせんとするに至る、そこに大弊害が起り来るのである、相互に交譲せず、強ひて意見を押し通ふし、相互の

主張を達せんとするには、是非とも多数を制せねばならない、多数を制せんとするには、こゝに党派の必要が起る。

二、政党と黨議

同気相感じ、同類相集り、相互の利害を同くし、禍福を一にすることを誓ひ、茲に相互に團結し、其の多数の勢を以て、議會を制し、政府を制し、内閣も組織し、議會も自由にし、国家全体を専制せんとするに至る、それが政党の組織と為る。而して其の政党の秘訣は、黨議を以て議員を束縛するに在り、黨議を以て議員を束縛せざれば、議場に多数を制する能はず、議會を自由にし、内閣を組織し、統治全体を専制することが出来ないからである。今日の狀態を以てすれば、政党は多数の勢を以て、議會中心政治の名を仮りて、上主権者に迫りて、主権の実を奪ひ、僅に其の名を与へて、盲目的印判の虚器を擁せしめ、下国民を脅し、我が党に加入せざれば、何等の利益を与へず、寧ろ反対派として圧伏し、我が党の利害、我が党の政治綱目に依りて、国民の農商工を左右し、宗教、文学、芸術等、人生々活上あらゆる事を操縦し、議會政治の美名の下に、其の私を逞くするに至るは、是れ必然の帰趨である。

三、我が党内閣、反逆の密謀

内閣は国民の内閣なり、国家の内閣なり、其の国家国民全体を表彰せる天皇の内閣なり、然るにも拘らず、彼等は何の遠慮もなく、臆面もなく、「我が党内閣」と傲嘯し居るではないか、やがては我黨議會、我黨国民、我黨政府、我黨国家と傲嘯するに至るであらう。其の總べてを我が党に私せざれば飽くことを知らない、是れ明かに反逆である。謀反である。是れ第二の北条、足利、徳川である。其の反逆、その謀反は、黨議束縛の密議にはじまる。中世以後、

北条、足利、徳川等が一門郎党の利害より団結したる、密議密謀より、其一門郎党の繁榮拡大となり、その多数の勢力を以て、上天皇に迫り、虚器を擁せしめ奉り、全国民を脅かして、酷制苛政に苦しましめ、以て国民を私し、領土財産を私し、国家を私し、恐多くも、天皇を私にせんとしたのと、今日の政党政治の私とは、其の間何等の差違がある。唯今日は、議會政治の下に、その私を恣にせんとするに過ぎない。国土を以て自ら任ずるもの、どうして袖手傍観が出来やうぞ、熱情勃然として起り、血涙滂沱たるは当然ではないか。

由來政党は公党にあらず、私党である。如何なる国家の憲法にも、之を認めたものはない、寧ろ憲法政治の弊害である。害菌である。かくの如きバチルスの私党の、黨議密議を以て、国民の選良、国家の代表たる議員を束縛するといふことが私ではないか、私党の私議を以て、国家国民の選良したる代表議員を束縛するといふことは、何より以て反逆の裏書である。謀反的、反逆的血判連判状の証明である。

既に国民より選出せられ、国家代表の議員として、而して私党の黨議に束縛せらるゝといふは、何等の不見識、何等の無節操ぞ、堂々たる議員としての資格を、吾と吾が身を侮辱したるものたるを知らざるか、其の堂々たる資格を、私に毀損したるものとなることを解せざるか、然も猶議會に出入して、其の可否の裁決に参加するとは、何等の厚顔無恥ぞ、黨議に束縛せられても、厚顔恥なき徒は、たとひ議員となるも、其の多くは皆是れ陣笠馬脚の徒のみ、其の議院に於ける何々委員と為り、何々委員長と為り、其の党派に於ける、何々正副議長、何々正副部長たるものも、夜分の提灯持、露払の先導たるに過ぎない、他の大臣次官参与官、或は会社重役たる人々の踏台たるに過ぎない。唯かくの如くして、幾分の名譽、配当、位置配当、利益配当に与かるに過ぎない。彼等は寧ろ之を目的として、議員たらんとするにも至るのである。かくては初めよりして私に出づるが故に、私党に組みし、私議に束縛せられて

も、固より承知の上で、得々として厚顔恥なきにも至るのだ、是れ全く国家国民等の全体を代表し居ることを思はないから、其の尊重すべき資格を忘れ、憲法政治の弊害と為り、バチルスと為り、毒菌の仲間入りをもするに至るのである。

四、政党の応援政党の庄伏

政党の応援に依りて、当選するといふことも誤りである。いかに中立候補者でも、政党に応援せられて当選すれば、其の政党に吸収せられ其の政党に加入せねばならなく、余儀なくせらるゝは、自然の道行である。ましてや初めより政党員たるものが、当選の後、其の政党に束縛せらるゝのは当然である。苟も議員たらんとするものは、正々堂々と、其の政見を發表し、筆にも口にも、之を立論演説して、国民の意思に問ひ、以て国民の賛成を受け、国民の選出する所となる、識見伎倆徳器を具足したものでなくては、国民国家全体を代表し得る資格がない、其の自己造詣の識見なく、平生涵養の徳器なきものが、議員たらんとするが抑々の誤りである。

厳格にいへば、自己独創の政見あり、其の平生に於て、国民を感化し、国民の推服を受け、確実に当選するものにして初めて議員たるの資格あり、国家国民を代表し得るものといふべきである。

然るに、其の人に非ず、其の資格なきものも、政党の応援あり、費用さへあれば、候補者となり、議員となり得るといふことは、国民の不注意はいふまでもなければ、亦この政党といふ応援があるからして、然らしむるのである、敵味方とも大政党といふを背景とするが故に、国民はその背景に庄せられ、其の候補者を選出するものとなるのである、此の意味に於ても、政党が、いかに憲法政治、天皇政治を傷害し居るかを知らるゝであらう。

今日貴族院に於ても、研究会の如く、会の議決を以て議員を束縛するが如きは、衆議院に於ける、党議束縛と均しく憲法制定の本意に戻り、議會開設の素志に背き、貴族院成立の精神を無視するものであれば、断じて之れが存在を許すべきものでない。此の決議束縛があるから、研究会の如きも存在し、其の首領も生息し得るのである。此の決議束縛がないなら、研究会も活動することが出来ないと共に、此の首領連も亦何事か為し得んやである、かくの如き決議束縛があるが故に、研究会も存在し、首領連も私心を逞うしつゝあるのである。私心を以て集まりたるが故に、常に私心を逞うしつゝあるに過ぎない、貴族院を破壊し、兩院制度を破壊するものは、研究会の如き団体である、私党的黨議決議を以て、貴衆兩院を攪乱し、議會制度を破壊する、政党政社めきたるものは、断じて議會に許すべからざるものとして、何れの方面に於ても、我が国に於ては、特種階級の横暴は、許すべからざるものとす、是れ開国の伝統的精神であり、歴史であり、亦国家統治天皇政治の根本原則である。

貴族院が政党なくとも、議事進行せらるゝものなれば、衆議院と雖も、政党なくして議事の進行せらるゝことは、議院法に依りて、明々白々である。然るを多年欧米の弊害に見倣うたる結果として、是れより外に運用の道なしと迷信して、弊害に弊害を馴致して今日に至れるは、いかにもなげ無き次第ではないか、なぜ吾より範を示して、世界列国を覚醒せしめざるか。

五、議會政治の迷信

今日の議會政治は、憲法政治の本体を忘却し、議會政治の真相を誤解し、此の憲法、此の議會を運用するには、政党に依らざれば、不可能なりとまで迷信するに至り、其の迷信の極は、政党政治を謳歌し、其の反逆を声援し、其の

横暴を助長し、其の党利党福、その私利私慾を恣にせしめ、敢て之を論駁し、之を膺懲せんとする、国士的義人烈士なき至れるは洵に痛嘆の至りではないか。

六、憲法制定の精神議會開設の精神

憲法を制定し、議會を開設したのは、斯くの如き私党跋扈を擁護する為ではない、寧ろかゝる私党の跋扈を制御し、杜絶せしめんが為に、起りたる憲法である、議會である、成文的憲法なきが為に、上下意思の疎通するを得ず、国家全体の意思を發表実行するを得ず。暴君政治現れ、寡頭政治現れ、豪頭政治現れ、宰相政治現れ、軍人政治、資本政治、藩閥政治等出で来りて、其の私党を樹て、私利を壟断するからして、上も下も其の迫害的苦痛に堪へず、国家全体が其の弊害疲労に堪へず、之を駆逐し、之を一掃せんが為に、起り来たる所の成文憲法である。議會の開設である、それにも拘らず、此の憲法の下に隠れ、此の議會の名を利用して、より以上なる暴悪なる、大私党の出で来りて、國政を擅にし、国家及び國民を迫害しつゝ、其の私利私慾を恣にするものありとせば、是れ全く憲法制定の本意に背き、議會開設の意思に反するものではないか、憲法を制定し議會を開設し、豪族政治を退治し、宰相政治を退治し、女官政治を退治し、軍人政治を退治し、藩閥政治を退治しながら、却てそれらに百倍する政党政治を謳歌するとは何事ぞや、近く例すれば、藩閥政治の弊害と政党政治の弊害とは、是れと彼れとを対照していかゞであるか、政党政治の弊害が、藩閥政治の弊害に百倍することは國民の均しく肯定する所であらう。独り中央に、其の党利壟断の弊害あるのみならず、地方も亦到る処に其の弊害を逞うするではないか、地方官は政党利用の器械となり、政党の盛衰と共に進退し、何等地方経綸を施すの歲月なく、二三年にして交迭するが故に、意見も考案も行ふの余地なく、地方

は唯衰靡するばかりではないか、是れ公然たる大弊害で、その私により、未派黨員が醜を曝露するのみでなく、其の党派の首領までが、国民からは、孰れも皆曰くつきの嫌疑をあげせかけられ居るではないか、いかに政党が私利私慾に墮落し居るかは、彼等自ら証明し居るといふべきである。今日の政党は、罪惡の製造所なりといふも、敢て過言ではあるまい、藩閥政治に比較して、より以上の罪惡を曝露したることは、争ふべからざる事實である、彼れを窃盜とすれば、是れは強盜である、その名義の如何に拘らず、種々の醜問題に關連して法廷に召喚せられ、或は偽証罪の嫌疑を受け、或は同僚を見殺に^{して}、刑場に監禁せらるゝも、冷然として何等の友情なく、或は公金窃取の風評に對して、何等の弁明もなし能はざる等の如きは、一国の大臣たる態度でない、しかも皆洒々然として政治に参加し、政治を談論す。欧米は自ら欧米の習慣あるべし、日本道德としては、恥を知らない、かゝる輩をして、政治に預ることを許せない、敢て昔日の如く割腹せよとはいはぬが、自ら国民に對し、其の不明不徳を謝し、暫く謹慎する所なかるべからず、是れ人間としての態度であり、日本道德の常道である、然るに此の態度なきものは、政党といふ背景を以て鉄柵とするからである。政党といふものは、徒に罪惡を出すのみでなく、罪惡の擁護者である、此の擁護者の背景には、警視庁も居れば、憲兵も居る、それでも足らぬ時は、兵隊も居る、あらゆる護衛機關を具備して居るから、如何なる惡事をして、此の鉄城に逃げ込めば、まづ以て安心である、実に世に恐ろしきものは、政党であるといふ感じが起るのではないか、憲法は此の如き政憲を擁護する為に出来たものでなく、議會はかゝる如き政黨員利用のために開設したものでない、かゝる弊害を驅逐せんが為の憲法であり、議會である。

七、憲法の反逆者、議會の謀反者

其の憲法の下にかくれて、之を利用しつゝ、憲法政治といひ、議會の名を利用して、議會政治といひ、そして之を運用するには、政党政治にあらねば、不可能なりとして、国民全体を欺きつゝ、政党万能の政治とし政党万能の自利自慾の間に国民の多數を吸収し、以て益々国家全体を私し、其の名譽、權勢、位置、利益等のすべてを壟斷せんとす、是れがどうして憲法の本意であらうか、憲法を利用して、その大なる私を為すに、憲法の反逆者である、議會の意思に戻り、議會を利用し、其の私を為すは、議會の謀反者である、真に憲法を体顯し、議會を運用せんとすれば、まづ以て此の政党といふ私党を征伐驅逐せねばならない、独り日本のみならず、世界皆政党の弊害を認めながら、どうして之を排撃驅逐するの勇氣が起らないか、彼等は既に弊害を認むれども、これに代るべき機關なく、道なきが為に、躊躇しつゝあるに過ぎない、我等日本人は、先づ以て之に自覺し、其の道を開拓せねばならない。

政党の罪惡は甚だしきものなれども、彼等政黨人を見て、悉く罪人なりと思つてはならない、彼等も皆人間である、誰れか好んで罪惡を犯すものがあらう、唯その慾望を充たさんが為に、政黨員たるが故に、党利党福の分前を目的として、其の罪惡者とも為り、嫌疑者ともなるに至るの中に知識あるものは、巧に法網を免れ居るといふに過ぎない、政党といふ背景がなければ、彼等は皆善人である、政党が彼等を驅つて、罪惡者たらしむるのである、此の意味に於いても、今日の政党は、益々以て驅逐せねばならない。

又憲法を運用し議會の活動を為すには、政党にあらざれば、其の運用も活動も出来ぬものゝやうに心得居るは、何たる迷信であるか、そんな大切のものであれば、憲法にも議院法にも明瞭に政党の一章を設けて、記載しおく筈である、其のこれなきは初めより政党といふものを、眼中に置いてない証拠である。

国家を離れ、國民を離れたる政治には、藩閥等の弊害の起るのと同様に、帝王、主權者を離れ、若しくは國民を離

れ、若しくは國家を離れたる主權論には、孰れの主權論にも、党閥の弊害を惹起すること、必然の結果である、予め之を究明せず、世界列國の憲法國は、孰れも唯漫然として、私に此の憲法議會を運用し得るものは、独り政党であると臆断したのは、千古の遺憾である、絶代の過失である、是れ蓋し他を驅逐して、其の再起を防禦するが爲に、憲法を制定し、議會を開設したる彼等は、それにて安堵し、自己等は之に代りて公明正大に國家全体を代表し、遺憾なく、統治の実を挙ぐることを得るものと過信したからである、同時に自己が代りて、第二の弊害者と爲り、統治を攪亂し、國家を私し、上下を圧逼苦悩せしむる妨害者であるといふことに気付かなかつたからである、今日も尚且つ其の憲法政治は、多数さへ得れば、天下何事でも成し得るものとして、反省することを知らず、吾と我が身に墓穴を掘りて、其の自滅を招きつゝあるのである、世は既に其の弊害に堪へず、その弊害を認めながら、之に追従し、之を謳歌するは、其の謀反に連判し、其の反逆に加担するものと同様である。而して政治家は何だ彼だと騒ぎ立てゝゐて、其の結果は、年百年中あらそひに争を重ねてゐる、治國安民はさておき、帝都の真中に、白昼盜賊が横行したり、利益問題で、親子が法廷で争つたり、學生が教師を袋叩にしたり、失業者の叫び声が、都鄙に充満したりするやうな、情ない有様ではないか、何が安民だ、何が治國だ、況んや共產主義者と無政府主義者等ありて、其の機を窺ひ、其の隙に乘じ、取りて代りて、より以上の謀反を爲し、より以上の大反逆を逞うせんとしつゝあるを知らば、何人も安閑茫然として、之を放任しおくに忍ぶまい、時機は夙に迫りて、吾等同人を促がして居る、國家社稷を思ふものの奮起すべき時機である。

八、公明正大なる議會の運用

然らばいかにすればよいかといふと、大公無私に憲法を運用し、正大不偏に議會を廻轉するの道を講ずれば足るのである、当選したる議員は、國家の代表である、其のまゝ召集に應じ、開院式に参列し其の所屬の貴衆兩院に出席する、出席の順序に依りて、席を定め、先頭者より、一二三四五十百と、次第に着席する、而して議院法そのまゝに、正副議長、全院委員長、各部委員、委員長を選出して、衆議院の成立を告げ、貴族員は貴族院として、其の手續を実行して、成立すればよい、其の間に、運動とか、交渉とかの必要はない、各議員が各自自由に眺め、自由に信じたるものを、何等の束縛干渉なく、自由に選出する、而して全院代表の全責任を完了する、今日の狀態では、全院議員より選出でなく、党派の選出党派の議長、委員である、しかも一党派の選出、一党派の委員である、特に予め其の人を定め、金のあるもの、腰の強いもの、運動に巧なもの、政党政幹部と予約済で、其の候補者となり済ます、圧伏的、盲目的に選出せしめつゝあるので、自党以外の議員は、初めから眼中に置かない、既に神聖なる議院を、一党のものとし、我が党に私しあるのである、何といふ横暴跋扈であるか、彼等は議院を無視したる、暴君政治、軍閥政治をなすつゝあるのだ、議院を利用し、衆議院を利用し、かくの如く、其の所屬の議員を圧伏し、盲目的に選出せしめつゝあるが如く、常に小教幹部の輩が、衆議院を利用し、党派を利用し、其の多くは是れ自己の權勢、名譽、位置の慾望を恣にしつゝあるのである、其の党派を利用し、盲目議員を踏台とするのみならば、まだしもなれども、議院を利用し、内閣を利用して、其の慾望を恣にせんとするに至りては、國民は断じて許すことは出来ない、議員の投票は、國家全体總合意思を代表したる議員としての意志發表で、他より圧伏せらるべきものでなく、干渉すべきものでもない、何人にも相談する必要はない、相談しなければ出来ない人は、議員たる資格はない、予め其の人を定めて、一党内のみの力を以て、盲目的に選出せしめるといふことは、議院を無視し、議員を侮蔑したる不法行為である、こんな不法行

為を用ひねば、委員か選出せられないといふ道理は、何処にあるか、自ら公明正大の道あるものを、何を血迷うてか、此の不法行為に出づるのだ、唯その私を恣にせんとするに過ぎない、然らずといふものあらば、かくの如き私党的強制の党議密議を用ひず、自ら公明正大の道に出で、各議員は、自由に其の国家の為に、善良なりと思ふものを選出するのが当然ではないか、均しく国民の選良である、全国全体総合意思の代表者である、予め敵味方の党派心あるべきものでない、宜しく公明正大の道に出で、自由に選出するのは、独り議員の意思たるばかりでなく、議院の意思である、議会の意思である、かくて初めて議會開設の本意にも叶ふと同時に、国家全体総合意思の満足となる、況んや其の議案討議に於てをやである、特にかくの如き政党があるが故に、相互に其の反対派に対しては、殆ど行路の人の如く、雲煙過眼視し居るのは、あまりに冷酷である、しかも党派といふものあり、党議といふものありて、所属議員を束縛するから、自然敵味方の觀を為すに至るのだ、又政党の束縛があるが為に、容易に発言するの機会を与へず、その勢力なきものは、己むなく沈黙し居るものも少くない、党議などに束縛せられないとすれば、相互に発言することが出来る、議員は同一議員で、均しく国家全体総合意思の代表者である、仮令その政見は異なる所ありとするも、天皇の御心を体し、国民の心を心として、国家全体の総合意思を本位として、合議決定もせねばならない、初めよりして敵味方の隔意あるべきものでない、相互に至誠で討議するには、自ら一致点を発見する、百川の海に注ぐが如く、帰入一致する、一案毎に賛否を異にしてよい、いづれの議案にも、一紀一律に進退を共にせねばならぬといふ事はない。

かゝる公明正大の道あるにも拘らず、初めより党派を樹立し、甲党乙党の議員を設け、相互に敵視挑戦するので、そこには独り感情の衝突ばかりでなく、怨恨積りて凝結し、中央地方とも、いふべからざるの確執と為る、宛然源平

豊徳、相對するが如く、初めよりして喧嘩腰である、それだから、常に脱線し、神聖な議場をして、車夫馬丁、浮浪乞食の群聚せるが如く、雜然、騒然たるのである、本来総合調和統一を本意とする、平和なる議場は、壇の浦や、関が原ではない、そんな敵意を含んで、出席せしむべきものでない、是れ全く党派党議の私を以て、公なる議場を運用せんとするから、かゝる不法の行為となる、議會には議會おのづから活動する公明正大の道がある、断じて政党の私議を容るゝことを許さない。

九、内閣の組織

然らば内閣組織の方法は如何、それは天皇の御親裁に依るべきものである。天皇がこれと思召す人を召して、内閣組織を命じ給ふべきは勿論である。命を蒙りたる其の人がその政見綱目を公にして、我と意見を同くする、学識、識見、経験ある人格者と交渉する平生修養経験ある人々なるが故に、相互に一朝夕の間に、其の賛否は決する、政党としては相互の権衡、相互の情実等があるから、左顧右盼、かにかくと悶着して、其の内幕の醜態が曝露するのだ。

然れども、此の意味に於ける内閣組織大命の人には、そんな関係がないから、何等の顧慮懸念なく、自由自在に、賢明なる人格者を求むることが出来、その入閣せんとする人々も、周囲に何等の関係がないから、自由自在に政見を開議し、其の政見合すれば、横行闊歩して、入閣することが出来る。暗夜竊に周囲に向つて、何分にもよろしく御援助を乞ふと、平身低頭して頼む必要がない。一国の大臣たるものが、運動や依頼に依る如き、卑屈なものではないけな

い。学識、徳望、気節の結晶たる大丈夫でなくてはならない。渾身これ国家。その国家全体の総合意思を代表する、信条、主義、政見、学識技倆を有すれば、其の大節を誤らないと共に、徳望一世に師表たる底の大丈夫にして、初め

て大臣たるの資格ありといふべきである。

十、大臣と議席、議席と大臣

大臣は必ずしも議場に議席を有するに及ばぬ、寧ろ有せざるを以て当然とする。議員は協賛者であるから批判者である。故に議員は監査役にして、大臣は取締役である。それであるから、大臣は議席を有せざるが本筋である。政党内閣とすれば議席を有し其の党議の下に、所属議員を指揮するが故に、其の便利あるべきも、多数を以て議場を脅かさんとする陰謀私慾なき時は、そんな必要を見ない。又殆ど着席などする暇もない。常に政府員として、議場に臨まねばならないからである。唯「議席を有することを得」とあるのみにして、必ず着席せねばならぬといふ意味ではない。固より議席を有せずとも大臣たることは得るのである。が、是れは深く究明すべきことと思ふ。政府員としての大臣は、その半面に議員を監視し、議員は其の半面に大臣を監視し、相互に公明正大にして、相互に無理な不正な、言論行為を監視し、国家経綸の妙案を討議施行することを庶幾するのみである。議員より監視せらるゝ所の政府員としての大臣は、被監視者である、被監視者の身を以て、監視者たる議員席に着くのは、猶政府委員に監視せられたる所の議員が、被監視者たる身を以て、監視者たる政府委員席に着くのと同様で、いづれも矛盾した行為となる。被告が原告となり、原告が被告となることは、事実上不可能なるが如く、判事が被告人となり、被告人が判事と為るといふ事も、不可能である。それと同一の理由に於て、政府員として的大臣が、議員となり、議員が政府員と為ることが矛盾である、或は大臣としては政府員となり、議席には議員として着席するが故に、其の資格が異なるから、矛盾でないといふかも知れないが、それでは原告が被告と為るも、原告の資格でなく、被告の資格になり、被告が原告と為る

も、原告の資格と為りて行くから好いとするか、それは詭弁で、原告と被告とは、同時に同一人となることは不可能である、何人も其の否を認めないものはない、故に議員にして入閣することあれば、道徳上その議員を辞し、又大臣にして議員たらんとする時は、其の大臣を辞して候補者にも立ち、当選するのが当然である、議員操縦、政党大臣といふ野心慾望がないならば、何にも大臣たる上に、議員たる必要なく、議員たるの上に、大臣たらねば為らぬといふ事はない、孰れにても其の一方のみにて、国家に尽すことが、十分に出来るではないか、寧ろ大臣は大臣として尽し、議員は議員として尽すのが、専門的に立案し、専門的に批判することが出来る、大臣は立案者として、国家全体の総合統一意思を表はして、其の施設を期し、議員は監視者として国家全体の総合統一意思を表はして、之を討議賛否し、相互に交譲融和を謀りて、其の案を成立することを旨とすべく、いづれも国家全体の総合調和統一大成の意思を本位として、正々堂々と、公明正大に討議大成するので、各議員が、自由自在に討議賛否する、国家全体の為を思ふのみである、双方とも其の間何等の利益交換もなければ、私に相求むるの慾望もない、茲に初めて公明正大の名案となり、国家全体の幸福を増進することとなるのである。

此の間に於て、失政ある時は、辞職勧告の建議案も出て、弾劾案も出る、其の案が通過すれば、潔く閣下に伏して、責を負ひ、辞職する、一類の議員を目的として、其の一類の政見要求を目的として、政治を為し、多数を待みて、政治を為すべきものではない、国家全体を目標として、経綸を立て、之を全体意思の代表者たる、全議員に相談して、協議決定しつゝ実行する、若し失政あり、其の立案も通過せぬ場合には、弾劾案を待たずして、潔く辞職する、大臣として、踏むべき道は、唯是れのみ、故に内閣成立の日に、直ちに其の政見を、天下に発表し、同時に各省大臣は、各省に於ける政見及び方針を発表する、『まだ白紙である、熟考調査の上ならでは、発表が出来ぬといふこ

とを許さない』そんな人は未だ大臣たるの資格がないのである。平生よりして自信あり、其の省に於ける、政綱方針の一定し居る程のものならでは、大臣を御受けすることはいけなない、而して議會に於ては貴衆兩院に於て、明瞭に總理大臣をはじめ、各省大臣が、其の委細を説明せねばならない、将来は一人でも、伴食大臣をおくが如き、情実を許さない、此の意味に於て、益々以て憲政阻害の政党といふものを驅逐せねばならない。

而して国民は天皇統治の大御心を心として、大臣も監視すれば、議員も監視し、其のすべてを監視する、苟も徒党を組み多数を恃んで、議會を利用し、内閣を利用して、其の私慾を逞くせんとするものあらば、大臣でも議員でも、憲政謀反者として容赦しない、迫りて辭職せしむ、大臣であらば、議院に弾劾案も出さしむる、議員であらば辭職勸告を為すと共に再び選出しない、国民が此の心になり、議員が此の心になり、大臣が此の心になれば、憲法も本意を達し、議會も素志を達し、初めて憲政有終の美を發揮することが出来る、我より世界憲法の將に亡びんとするを救ひ、其の復活を祝福することが出来る、是れが国民の心にして、政府の心にして、議會の心にして、国家全体総合統一の天皇としての意思である。憲法運用の道は他なし、一に此の公明正大の大道である、是に至りて、天皇道の説明が必要となる、天皇道が判かれれば、どうしても大臣も議員も、皆この公明正大の大道によらねばならぬ事となるのである。

(年代不詳)

第十三 皇道の真髓

一 緒 言

從來皇道と云つたり、神道と云つたり、乃至我が国体などと云へば世間知らずの時代遅れと嗤はれてゐたが、近來は盛に皇道とか、神道とか、国民精神とか、日本精神とか、乃至は我が大日本帝国の建国の精神などと叫ばれるを聞くに至つた。是は誠に嬉ばしい現象である。

近い頃まで嗤はれてゐた者が、此の頃になつて迎へられるに至つたのは何うした訳か。是他無し、長夜の眠が醒めたのである。一も西洋二も西洋と云つて欧米の物質文明に眩惑し、物も彼に取り、事も彼に学び、彼に在る事ならば考慮を用ひずして倣ふと云ふ所謂欧米心酔から醒めたのである。凡そ事物の真を得なければ、行く所迄行けば必ず行詰る。欧米の物質文明は名の如く物質のみの文明である。精神の籠らない文明である。然るに宇宙も人類も皆精神と物体とから成つてゐるのみならず、寧ろ精神あつての物体であるから、長く此の精神を忘れた物質のみの文明に満足する筈は無い。然も今日世界の事態が年と共に紛糾し、從來の國際甘言に満足する事が出来なくなり、漸くにして我を顧みる氣運に到達し、欧米心酔から覺醒するに至つたのである。